

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | アガンベンにおけるバンヴェニスト (3) : 中動態, 語彙論                                                                                                                                                                                   |
| Sub Title        | Benveniste in Agamben (3) : middle voice, vocabulary                                                                                                                                                              |
| Author           | 高桑, 和巳(Takakuwa, Kazumi)                                                                                                                                                                                          |
| Publisher        | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会                                                                                                                                                                                                   |
| Publication year | 2020                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.52 (2020. ) ,p.93- 109                                                                                      |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20201231-0093">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20201231-0093</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## アガンベンにおけるバンヴェニスト (3)

### 中動態, 語彙論

高桑 和巳

#### 0. はじめに

本稿では、ジョルジョ・アガンベンの仕事全体において言語学者エミール・バンヴェニストの業績がどのように参照されているかを確認する作業を継続する。すでに2回にわたる作業が終了しており、今回は最終回である<sup>1)</sup>。

一般言語学関連では、中動態以外のすべての議論（主としてセミオティック／セマンティック、言表行為<sup>エノンシアシオン</sup>についてだが、その他の議論も含む）を確認済みである。今回はその中動態についてまず整理する。

語彙論関連は、初期にアガンベンが触れたトピックは確認済みだが、その他のトピックはすべて宿題となっている。今回はそれらをすべて片づける。

「アガンベンにおけるバンヴェニスト」はこれで実質的に網羅されるはずだが、『語彙論』の英語訳に付された序文「語彙と声<sup>2)</sup>」(アガンベン自身による総括とも読める)だけは、紙幅の都合で検討から外す。

#### 1. 中動態

アガンベンは、バンヴェニストの「動詞における能動態と中動態」(1950年)を参照せずに中動態に言及したことはない。

---

1) 本稿は、以下に続くものとして書かれている。高桑和巳「アガンベンにおけるバンヴェニスト (1) セミオティック／セマンティック」、『日吉紀要 人文科学』第35号(慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会, 2020年6月)195-220頁。「アガンベンにおけるバンヴェニスト (2) 言表行為<sup>エノンシアシオン</sup>」、『日吉紀要 フランス語フランス文学』第71号(慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会, 2020年10月)161-181頁。

2) Giorgio Agamben, "The Vocabulary and the Voice," trans. Thomas Zummer, in Émile Benveniste, *Dictionary of Indo-European Concepts and Society*, trans. Elizabeth Palmer (Chicago: Hau Books, 2016), pp. ix-xx.

また、中動態へのはじめての明示的言及はかなり遅い。明示的に中動態が名指されるのは近年（『身体の使用』（2014年）およびその周辺）に限られる。

最初の登場は、「フランス中部で2013年夏におこなわれた講義にもとづいている<sup>3)</sup>」とされる、「脱構成権力とは何か？」（2014年）というテキストである。『身体の使用』に実質的に統合されることになる議論が、いわば予告篇のように展開されていると言える。

アガンベンはそこで、政治に関する根本概念はもはや生産や実践ではなく無為や使用であるとしたうえで、その「使用」を、それが近代に帯びてしまった功利主義的ニュアンスから解放することを目指す。

そのために、ギリシア語で「使用する」に対応する動詞 *chrēsthai* が呼び出される。この動詞は「それ自体の意味はもたず、意味は後続する辞項に由来すると思われ、また、私たちはそれ〔後続する辞項〕は対格だろうと予期するが、そうであることは一度もなく、与格か属格である<sup>4)</sup>」。そして、いくつかの用例（「神を使用する→神託を聞く」、「回帰を使用する→郷愁を抱く」、「言語を使用する→話す」など）が示された後、バンヴェニストの議論が紹介される。

動詞 *chrēsthai* は、文法家たちが「中動態」として分類する動詞、つまり能動的でも受動的でもなく、ともに両者であるという動詞である。中動態に関するバンヴェニストの研究が示しているのは、能動態では動詞は主語から出発して主語の外で実現されるプロセスを示すのに対して、「中動態では〔……〕動詞は主語を座とするプロセスを指示する。主語はプロセスに対して内的である」。中動態だけ（*media tantum*）をもつ動詞の例を見れば、自らが動作主となるプロセスの内側に主語があるという独特の状況がうまく描き出されるだろう。*gignomai*（ラテン語 *nascor*）は「生まれる」、ラテン語 *morior* は「死ぬ」、*penomai*（ラテン語 *patior*）は「被る」、*keimai* は「横たわる」、*phato*（ラテン語 *loquor*）は「話す」、〔ラテン語〕*fungor, fruor* は「享受する」、など。これらの事例すべてにおいて、「主体はプロセスの場である。ラテン語 *fruor* やサンスクリット語 *manyate* のように、そのプロセスが対象〔目的語〕を要求することもあるが、そのばあいでも同じことである。主体はプロセスの中心であると同時にプロセスの行為者である。主体は何かを完了するが、その何かは主体自らにおいて完了される」。

能動態との対立関係は、能動態にもできる中動態動詞では明瞭である。*koimatai*「彼は眠る」では、主体はプロセスに対して内的だが、これが *koima*「彼は（誰かないし何かを）眠らせる」になると、プロセスの場はもはや主体にはなく、それ以外の辞項へと推移的に移されることになり、それが対象〔目的語〕となる。そこでは主語は「プロセスの外

3) Agamben, “What is a Destituent Power ?,” trans. Stephanie Wakefield, *Environment and Planning D: Society and Space*, 32 (London: Pion, 2014), p. 65.

4) Agamben, “What is a Destituent Power ?,” p. 67.

側に置かれ、行為者としてプロセスを支配する」。その結果、行為は目的として外的な対象を取らなければならない。その数行後で、バンヴェニストは中動態を能動態と関連づけて論じているが、そこで彼は、主体が動作主とも座ともなるプロセスと主体とのあいだで中動態が引き受ける特有の関係を次のように特定している。「それ〔能動態と中動態の対立関係〕は結局つねに、主語がプロセスに対して外的か内的かにしたがって、主語の位置をプロセスに対して位置づけるということに帰着する。つまり、かたや能動態においては主語が実行するということにしたがって、かたや中動態においては主語が自己変状しつつ実行する (il effectue en s'affectant) というということにしたがって、主語を動作主と形容することに帰着する<sup>5)</sup>」。

そして、中動態に与えられた mesotēs (「中間」) という名はこの事態をよく表している、と説明が続いている (なお、mesotēs には単に「能動」と「受動」の「中間」として与えられた名称だという由来しかない——むしろバンヴェニストの議論はその構図を崩そうとした——) ので、この説明にはほとんど意味がない)。すなわち、中動態は「主語と対象〔目的語〕のあいだ (動作主はあるしかたで、行為の対象にして座である)、能動と受動のあいだ (動作主は自らの行為において変状を被る) の非規定地帯<sup>6)</sup>」にあるとされる。

この議論が、chrēsthai の説明にそのまま使われる。「私たちはいまや、chrēsthai の意味を定義づけようと試みることができる。それが表現するのは、人が自分自身ともつ関係、人が特定の存在と関係をもつかぎりにおいて受ける変状である<sup>7)</sup>」。つまり、chrēsthai は (アガンベンを考える政治的カテゴリーにおいて) 中動態を代表する動詞とされたということである。

この論文でこれ以外にバンヴェニストの名が登場するのは、脱措定動詞<sup>デポネント</sup>に関する一節だけである<sup>8)</sup>。ここでもほぼ同一の議論が前提されているが、deponent に関する奇妙な語釈 (というより牽強附会) が追加されている。念のためその一節も参照しておく。

ラテン語の文法家は、正確には能動とも受動とも呼べない、その点では中動態動詞に似

5) Agamben, "What is a Destituent Power ?," p. 68. アガンベンが参照しているのは以下。Benveniste, "Actif et moyen dans le verbe," in *Problèmes de linguistique générale* (Paris: Gallimard, 1966), pp. 172-173. なお、media tantum の例も「眠る」の例もバンヴェニストから孫引きされているが (pp. 171-173), 参照は不正確である。

6) Agamben, "What is a Destituent Power ?," p. 68.

7) Agamben, "What is a Destituent Power ?," p. 68.

8) 「形式所相動詞」「能動欠如動詞」「形式受動相動詞」「異態動詞」などと訳される deponent verb だが、ここではアガンベンの議論にあわせて「脱措定動詞」としておく。deponent の通例の意味は、形式においては受動態だが受動的な意味を「置き去」って (脇に置いて) 能動的な意味を担うというほどのこととおぼしい。

ている一群の動詞を、<sup>デポネント</sup>脱措定動詞 (depositiva な動詞、これは絶対的動詞ともスピズム動詞とも言われる) と呼んだ。sedeo, sudo, dormio, jaceo, algeo, sitio, esurio, gaudeo といった動詞である。中動態動詞や<sup>デポネント</sup>脱措定動詞は何を「depose [脱措定する, 置き去る]」のか? それらの動詞はこれこれの操作を表現するのではなく、むしろこれこれの操作を脱措定し、中和し、働かなくさせ、そのようにして露出させる。バンヴェニストの言葉によれば、主語は単にプロセスに対して内的なのではない。主語は自らの行為を脱措定して、露出され、自らの行為とともに問いに付される。この意味で、これらの動詞は行為や実践のみならず、主体の理論をも新たなしかたで考えるパラダイムを提供しうる<sup>9)</sup>。

「脱構成権力とは何か?」におけるバンヴェニストの中動態論への言及は以上ですべてである。残るは『身体の使用』である。

『身体の使用』の第1部第2章は「クレシス」と題されている (章題に使われているギリシア語 chrēsis は、chrēsthai を実詞化したもの、つまり「使用」である)。まず、ジョルジュ・ルダールという研究者がいわばバンヴェニストの囁ませ犬のような役回りで登場させられる<sup>10)</sup>。chrēsthai の語義を確定しようとするルダールの試み (1950 年) を、要するに中動態の何たるかを理解しなかったがゆえのものと断定し、バンヴェニストの中動態論文 (ルダールの発表にわずかに先立ち、ルダールも参照している) のほうに軍配を上げている。それ以降、提示されている議論は「脱構成権力とは何か?」におけるものとほぼ同一である<sup>11)</sup>。これに、スピノザの『ヘブライ語文法提要』に登場するラディノ語 pasearse に関する議論が後続している。

なお、このギリシア語 chrēsis はアガンベンにとっていわば因縁の辞項である。『残る時間』では、パウロの書簡群に登場する chrēsis (に直接関わる chrēsai, chrōmenoi など) が検討され、「所有」(dominium) に対置されるものとしての「使用」(usus) が云々される。そして、その「使用」が実際に展開された事例としてフランチェスコ会の実践が引かれる<sup>12)</sup>。このフランチェスコ会における「使用」の特異性はその 10 年あまり後、『いと高き貧しさ』(2011 年) において十全に分析されることになる<sup>13)</sup>。その 3 年後の『身体の使用』における chrēsis 論は、この一

9) Agamben, “What is a Destituent Power?,” p. 72. <sup>デポネント</sup>脱措定動詞の説明が不正確だが (たとえば、それはスピズムと同義ではない)、ここでは措く。

10) ルダールの発表がおこなわれた研究会の座長がバンヴェニストだったという逸話的事実も言及されている。以下を参照。Agamben, *L'uso dei corpi* (Vicenza: Neri Pozza, 2014), p. 48.

11) 以下を参照。Agamben, *L'uso dei corpi*, pp. 51-53. <sup>デポネント</sup>脱措定動詞についてのみ別の箇所で言及されているが (p. 350), その議論の内容はやはり実質的に「脱構成権力とは何か?」と同じである。

12) 以下を参照。Agamben, *Il tempo che resta* (Torino: Bollati Boringhieri, 1998), pp. 31-32.

13) 以下を参照。Agamben, *Altissima povertà: Regole monastiche e forma di vita (Homo sacer, 4-1)* (Vicenza: Neri Pozza, 2011), pp. 151-175. そこには、パウロの chrēsis についてもほぼ同一の言及がある (pp. 170-171)。

連の議論の最終的な結実と見なせる。

アガンベン全著作中に、中動態に関するこれ以外の言及は存在しない。

## 2. 中動態の近傍の語彙 trephein, auctor

ただし、中動態に関連づけることができなくもない語彙が *chrēsis* 以外にもう 1 つ——強いと言えば 2 つ——ある。trephein（給養する）と、auctor（権威者）である。ただし、先回りして確認しておけば、この trephein と auctor をめぐって中動態関連の議論が展開されることはない。

trephein にアガンベンがはじめて言及するのは「もの自体」（1984 年）においてである。ただし、それは正確には、引用文中に trephein が登場したというにすぎない。それはプラトンの「第七書簡」で、哲学によって思考される当のもの——それが「もの自体」である——が師弟間でどのように伝承されるかが述べられている箇所の引用である。

このものについて私が書いたものはいまのところ存在しないし、これからも存在することはありえない。じつのところ、このものは、他の分野（*mathēmata*）のようには、どのようにしても言うことができない。このもの自体について（*peri to pragma auto*）〔師弟で〕ずっといっしょに暮らすと、その後にそれは即興的に、火から光がはじけ出すように魂のなかに生まれ、その先は自分で自分に給養する（*auto heauto ēdē trephei*）ようになる<sup>14)</sup>。

哲学という思考は思考を思考する（「思考は思考の思考である<sup>15)</sup>」（*estīn hē noēsis noēseōs noēsis*））以上、いったんそこに「火」が付けば、その先は自己変状の過程としての哲学がいわばおのずから展開される、というほどのことだが、プラトンがこれを説明するにあたって「自分で自分に給養する」という奇妙な表現を用いているということ、またアガンベンがその奇妙さに注目してわざわざ原語を指示しているということには注目しておいていい。ただ、すでに述べたとおり、ここに中動態への言及はないし、さらに言えばバンヴェニストへの言及もない。

14) Agamben, “La cosa stessa” (1984), in *La potenza del pensiero* (Vicenza: Neri Pozza, 2005), p. 11. 引用されているプラトンは以下。プラトン「第七書簡」341 c4-d2.

15) アリストテレス『形而上学』1074 b 35. この表現をアガンベンは幾度も引いている。以下を参照。Agamben, “\*Se: L’assoluto e l’Ereignis” (1982), in *La potenza del pensiero*, p. 167 ; “La potenza del pensiero” (1987), in *La potenza del pensiero*, p. 287 ; “Pardes: La scrittura della potenza” (1990), in *La potenza del pensiero*, p. 360 ; “Bartleby o della contingenza,” in Agamben & Gilles Deleuze, *Bartleby: La formula della creazione* (Macerata: Quodlibet, 1993), pp. 55–56 ; *Homo sacer*, 1 (*Il potere sovrano e la nuda vita*) (Torino: Einaudi, 1995), p. 54 ; “Che cos’è la creazione ?” (2012 ?), in *Creazione e anarchia: L’opera nell’età della religione capitalista* (Vicenza: Neri Pozza, 2017), pp. 45–46.

次に trephein が登場するのは「絶対的内在」(1996 年)においてである<sup>16)</sup>。そこではバンヴェニストによる trephein の解釈が参照される。ドゥルーズ-スピノザにおいて語られる内在的原因ないしコナトゥス (conatus) (自らの存在への再帰的な固執、<sup>りき</sup>力み) を考えるにあたり、アガンベンはず、それは生の「パラダイムを給養の生という最も低次の図式へと引き下ろしている<sup>17)</sup>」と述べつつも——つまり、それは植物状態になってしまった人間の生に等しい——、その給養という辞項の意味に注意してやらなければならないとしている。「[……]「自らに給養する」とは何を意味するのか? ギリシア語の trephein という動詞はさまざまな意味をもっており (給養する, 成長させる, 凝固させる), それらは必ずしも互いに相容れない。バンヴェニストはある重要な論文で、それらの意味をあらためて一つにまとめようとしている<sup>18)</sup>」。そして以下が引かれる。

じつのところ、最もありふれた用法であれば trephein を「給養する」と訳すが、実際にはこれがあらゆる例に適しているわけではない。これは、より広くもありより明確でもある意味のなかの、一つの狭い意味であるにすぎない。trephein のもつ意味上のつながりの全体を説明するには、次のように定義しなければならない。すなわち「成長に従っているものの展開を (適切な手当てによって) 促すこと」である。[……] ここで挿入されるのが、特殊かつ「専門的」な展開、つまりまさに「凝固させる」という意味である。ギリシア語の表現は trephein gala であるが、これはいまや「乳の自然な成長を促すこと、乳をそれが向かっている状態に到達するにまかせること」と文字どおり翻訳する必要がある [……]<sup>19)</sup>。

つまり、そのようにして「給養される」というのは「自己変状へと導かれる」という意味に他ならない。この意味で、trephein 論は単なる語彙論というより、chrēsis 論にも似て、中動態論・自己変状論・絶対的内在論に密着した議論だと言える。さらには、trephein は、そのように明示されていないとしても、chrēsis と同様 (あるいはまた、スピノザの語彙であれば acquiescentia [安らぎ] や pasearse [散歩する] や conatus [<sup>りき</sup>力み] と同様)、自己変状や中動態を思考するにあたっての重要な語彙に属すると見なされているとも言える。

このことは、この議論が『身体の使用』で再説されるところを見れば、より明瞭に確認でき

16) trephein に関する議論はバンヴェニストでは『語彙集』ではなく『諸問題』第 1 巻に見られるものだが、ここでは語彙論に含める。

17) Agamben, “L'immanenza assoluta” (1996), in *La potenza del pensiero*, p. 400.

18) Agamben, “L'immanenza assoluta,” p. 400.

19) Agamben, “L'immanenza assoluta,” pp. 400-401. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, “Problèmes sémantiques de la reconstruction” (1954), in *Problèmes de linguistique générale*, p. 293.



る。少し長く引用する。

エミール・バンヴェニストはある模範的論文で、ギリシア語の動詞 *trephein* が一見すると説明のつかない二つの意味をもっているということに注意を喚起している。この動詞は「給養する」という意味にも、また「液体を濃くする、凝固させる」という意味にもなる（たとえば、*trephein gala* は「乳を凝固させる」を意味する）。*trephein* の真の意味が、単に給養するということではなく、むしろ「これこれのものが成長するにまかせる、その自然な展開を促す」ということだと理解すれば、この困難は解消される。*trephein gala*（「乳に給養する」、つまり「乳が凝固するにまかせる」）と *trephein paidas*（「子どもたちに給養する」）のあいだに矛盾はない。というのも、いずれも「これこれのものが自然に向かう状態に達するようまかせる」ということを意味しているからである。

アリストテレスにおいて *trephein* やその派生語 *threptikon* がもっている意味は、明らかにこれである。アリストテレスが、給養の魂は「それをもつ者の存在を保存する原則」だと書きえているのはそのためである。ところが彼は、生の分割の政治的印徴という機能を堅持する必要性だけを気にかけてがゆえに、人間たちの都市を定義づける幸福と徳から給養の生を排除しなければならなかった。

アリストテレスに抗して、またアリストテレスとともに、給養の生を、生きものの向かう状態に達するようまかせるものとして考えること、あらゆる存在を当の存在を保存する（*sōzein tēn ousian*）よう仕向けるコナトゥスとして考えなければならない。給養の生の<sup>アレテー</sup>徳を思考することを私たちは学ばなければならない、というだけではない。*trephein* はこの意味で、生きものの根本的な力能を名指している。その衝動のおかげで、あらゆる能力は、それが自然に向かう状態へと達するのである。その政治的な意味は、都市におけるその排除－包含のうちにあるのではなく、それが、心臓が鼓動するにまかせ、肺が呼吸するにまかせ、魂が思考するにまかせつつ、あらゆる生の形式に単一性と意味を授けるといふ事実のうちにある。これまで私たちは政治を、生の分割と分節化のおかげで存続するものとして、生をそのつど人間の生、動物の生、植物の生と形容する、生の生自体からの分離として思考してきた。そうではなく、いまや、〈生の形式〉の政治、形式から分割することのできない生の政治を思考するのでなければならない<sup>20)</sup>。

*trephein* に関連づけられなくもない辞項への言及として、*auctor* への言及も見ておく。これは父、庇護者、後見人、保証者、作者などを指すラテン語で、*auctoritas*（つまりは広い意味

20) Agamben, *L'uso dei corpi*, pp. 262–263. なお、『身体の使用』の別の箇所でもこの *trephein* に関するバンヴェニストの議論は参照されているが（p. 180）、そこでは単に、二つの互いに矛盾する意味を統一する意味を探し求めることの一般的例示に用いられているだけである。



での「権威」)をもつ者である。この auctor に関して、アガンベンはやはりバンヴェニストの議論を借りて(そして修正して)いる。auctor はほとんど、trephein する者だと言ってもいい。『例外状態』(2003 年)に次のようにある。

この辞項 [auctor] は動詞 augere から派生している。auctor は qui auget, つまり、誰か他の者の行為——ないしは法的状況——を増大させ、増やし、完成させる者である。バンヴェニストは『語彙集』の法権利に関する部分で、動詞 augere——インド-ヨーロッパ地域では、意味深くも、力を表現する諸辞項と結びついている——の原初的な意味は単に「すでに存在するものを増やす」ではなく、「自分の胸から何かを生産する、存在させる」だと示そうとした。本当は、古典世界の法権利においては、この二つの意味は互いにまったく矛盾していない。じつのところ、ギリシア-ローマ世界は無からの創造<sup>エクス・ニヒロ</sup>を知らない。創造行為はつねに、形に乏しい質料や不完全な存在といった何か別のものを含意しており、それを完全なものにしたり育てたりすることが問題となっている。あらゆる創造はつねに共創造であり、それと同じくあらゆる作者はつねに共作者である<sup>21)</sup>。

### 3. その他の語彙 (1) sacer, sacramentum, horkos, kolossos, pistis, fides, \*kred

アガンベンによって言及されるバンヴェニストのその他の語彙論を、以下、ゆるいテーマを設定して整序する。

別稿ですでに挙げた「調和」(harmonia)に関する語源談義と、「遊び/言葉遊び」(ludus/jocus)に関する議論はいずれも 1970 年代後半に参照されたもので、次に語彙論(「聖なるもの」(sacer)と「等身像」(kolossos)に関するそれ)が具体的に参照される 1995 年(『ホモ・サケル』)までには相当の時間が経っている。

「聖なるもの」(sacer)の意味の解釈に関するかぎり、バンヴェニストの見解は肯定的に参照されている。「バンヴェニストの言うとおりに、犠牲となるものを聖なるものとするには、「それが生きものの世界から分離され」なければならない。「それは、二つの宇宙を分離している境界線を踏み越え」なければならない。「これが、死に至らしめるということの目的である」<sup>22)</sup>。ただし、碩学バンヴェニストにしてもやはり「聖なるもののイデオロギー」とでも呼べるようなものの影響下にある、というのがアガンベンの立場である。

21) Agamben, *Stato di eccezione (Homo sacer, 2-1)* (Torino: Bollati Boringhieri, 2003), p. 98. バンヴェニストは以下を参照しているとある。Benveniste, *Vocabulaire des institutions indo-européennes*, 2 (Paris: Minuit, 1969), p. 148. 実際には p. 149 以降も参照されている。

22) Agamben, *Homo sacer*, 1, p. 76. アガンベンが引用しているのは以下(すでに引いた箇所のわずか先にあたる)。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 2, p. 188.

「聖なるもの」に関する議論は、バンヴェニストではフロイト批判論文にも登場している。そこでバンヴェニストはカール・アーベルの原始語論を批判している。アーベルに対するバンヴェニストの立場は、「原始語には対立がない（個々の辞項は対義的な意味の双方をともに含意する）などというアーベルの珍説は学問的な検討には値しない」というほどの、容赦のないものである。『ホモ・サケル』で当然のことながら重要な意味をもつことになるラテン語 *sacer* については、フロイト批判論文では「聖なるものの現象学に関する多くの研究によって、その本源的二元性が平凡化されて以来、この観念の両価性に私たちが驚くことはないだろう<sup>23)</sup>」という形で述べられている。*sacer* が聖なるものと呪われたものの両方を意味するのは確かだが、それはラテン語が原始語的性格をもつからではなく、聖なるものがもともとそのような両価性をもつからだ、ということである。

それに対してアガンベンのは、この「聖なるものの現象学」というのが一種の無根拠なイデオロギーとなってある時期の人文知を席捲し、バンヴェニストもその影響を逃れることはなかった、というほどのものである。つまり、この件に関してはアーベルもバンヴェニストもともに批判対象になっている。

ただし、『ホモ・サケル』でアガンベンが参照するのはフロイト批判論文ではなく『語彙集』である。「[……] この「聖なるものの両義性」に関する」理論が時代にもたらした影響も、他の学問分野へとなされたその伝達も、ともに執拗なものだった。主権に関するバタイユの探求が不評にさらされた後になっても、20世紀言語学のあの傑作、エミール・バンヴェニストの『インド-ヨーロッパ諸制度語彙集』にさえ、この理論はあいかわらず姿を現しているほどである<sup>24)</sup>」。

『ホモ・サケル』の10年あまり後に刊行された『言語活動の秘蹟』でも同様の指摘が繰り返されている。参照されているのはやはりフロイト批判論文ではなく『語彙集』である。「[……] 宗教的現象の根本的カテゴリーとしての、両義的で曖昧で無規定であるだけに恐ろしい「聖なる権力ないし実体」という考えは、デュルケーム、フロイト、ルドルフ・オットー、モースにのみならず、さらにはバンヴェニストの『語彙集』という20世紀の言語学の傑作にも影響を及ぼした<sup>25)</sup>」。

---

23) Benveniste, “Remarques sur la fonction du langage dans la découverte freudienne” (1956), in *Problèmes de linguistique générale*, p. 81.

24) Agamben, *Homo sacer*, 1, p. 83. アガンベンのは、バンヴェニストの見解は具体的には以下とおぼしい。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 2, p. 188. 「[……] 神々に捧げられるものと消せぬ汚れを担うもの、厳かなものと呪われたもの、崇敬に値するものと恐怖を惹き起こすものという、「聖なる」ものの両義的性格が見いだされるのもラテン語においてである」。

25) Agamben, *Il sacramento del linguaggio: Archeologia del giuramento (Homo sacer, 2-3)* (Roma-Bari: Laterza, 2008), p. 21.

さらに、『カルマン』（2017年）でも、『語彙集』第2巻における「聖なるもの」をめぐる細かな検討が長く参照されている<sup>26)</sup>。

さて、「聖なるもの」に関しては、『言語活動の秘蹟』にも、「誓言」（sacramentum）との関わりでバンヴェニストの援用が見られる。

バンヴェニストは次のように書いている。「sacramentum [誓言]（私たちの serment [誓言]の元）は sacer [聖なるもの] にすることという観念を含意している。誓言には、人間が被りうる最も恐ろしい、聖なるものという性質が連合されている。すなわち、「誓言」はここでは、しかじかの条件下で自らを sacer [聖なるもの] にするという操作として現れる」。「……」同じ意味で、誓言は devotio [捧げ]と見なされうる。「誓言の定式が口にされるやいなや、人はあらかじめ「捧げられた」存在となる。「……」というのも、誓言とは devotio [捧げ]だからである。すでに見たとおり、ギリシア語の horkos [誓言]は、誓いの言葉が侵犯されたばあいには復讐心ある神の権力に前もって自らを捧げておくということを含意している<sup>27)</sup>」。

（この「捧げ」（devotio）について、少し脱線になるが言及しておく。『ホモ・サケル』で、「捧げ者」（devotus）（神頼みのために自分の身を捧げる誓言をした者）に関する議論に際して、「等身像」（kolossos）（「捧げ者」の身代わりとなる像）のもつ意味が云々される箇所にもバンヴェニストの名が現れる。ただし、その言及は中途半端である。「J-P・ヴェルナンとエミール・バンヴェニストは、一般的に言って等身像の機能がどのようなものであるかを示した。すなわち、異常な状況下にある分身を自分へと引きつけ固着することで、等身像は「死者の世界と生者の世界のあいだに正しい関連をあらためて定めることを可能にする」<sup>28)</sup>」。この引用はヴェルナン『ギリシア人における神話と思考』（1965年）からのもので<sup>29)</sup>、このテーマを扱っているバンヴェニストの論文は実際には参照されていない<sup>30)</sup>。また、「捧げ者」に関連しては、『いと高き貧しさ』で、修道会入会の宣誓が「捧げ」（devotio）に関する議論を援用しつつ検

26) 以下を参照。Agamben, *Karman: Breve trattato sull'azione, la colpa e il gesto* (Torino: Bollati Boringhieri, 2017), pp. 29-32. 参照されているのは以下。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 2, pp. 189-191.

27) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 41. バンヴェニストからの引用は以下（二つめの引用は、省略前後の文を入れ換えるなど比較的自由になされている）。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 2, pp. 168-169, 243.

28) Agamben, *Homo sacer*, 1, p. 109.

29) 以下を参照。Jean-Pierre Vernant, *Mythe et pensée chez les Grecs* (Paris: François Maspero, 1965), p. 77.

30) 明記されていないが、念頭にあったとすれば以下だろう。Benveniste, "Le sens du mot κολοσσός et les noms grecs de la statue," *Revue de philologie*, série 3, 6 (Paris: Klincksieck, 1932), pp. 118-135.

討される一節で、バンヴェニストの——こちらは『語彙集』に見られる——「捧げ」の誓言の実際に関する叙述が引用されている<sup>31)</sup>。

さて以下、『言語活動の秘蹟』に見られる、誓言に関する議論におけるバンヴェニストの援用も整理しておく。そもそも、この本は誓言の一種の系譜学として書かれているが、そのほぼ冒頭で、誓言の定義づけにあたってバンヴェニストが援用されている<sup>32)</sup>。

[……] エミール・バンヴェニストは1948年の論文「古代ギリシアにおける誓言の表現」の冒頭でその「誓言の」機能を次のように定義づけている [……]。「それ[誓言]は支え、保証し、明らかにするが、何も基礎づけない、独特な陳述様態である。個人的なものであれ集合的なものであれ、誓言はそれが強化し莊嚴化する当のものによってのみ、すなわち取り決め、約束、宣言によってのみ存在する。それは、意味ある内容を所有するただ一つの言葉の行為を準備し、もしくは終了させるが、それによってそれ自体が何かを言表するわけではない。それは本当は口頭の儀礼であって、しばしばそれが、さまざまに異なる形式をもつ手ぶりの儀礼によって補填される。その機能は、それによって生産される断言に存するのではなく、発せられる言葉と援用される力能のあいだ [……] に制定される関係に存する<sup>33)</sup>」。

とはいえ、バンヴェニストに注文が付かないわけではない。あるイデオロギー——既述の「聖なるもののイデオロギー」とも並行的に捉えられるようなもの——があり、それにバンヴェニストもやはり囚われているのではないかというのである。すなわち、歴史を遡るほど（あるいは歴史の黎明期、先史時代には）、人間はより宗教的・呪術的だっただろうとする——というか、そのような説明がよいによって誓言に関する謎をオイディプスよろしく解決できると思いあがる——イデオロギーである<sup>34)</sup>。

31) 以下を参照。Agamben, *Altissima povertà*, pp. 52-53. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 2, p. 237.

32) 誓言が、身振りをともなうにせよ本質的には言語の行為であるという解釈を共有している研究者として、リュシアン・レヴィーブリュールやニコル・ロローらと並んでバンヴェニストも名を挙げられている。以下を参照。Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 9. また、誓言が神々の名にかけてなされるという点に同意する研究者として列挙される者たちのなかにもバンヴェニストの名が見える (p. 44)。

33) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 7. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, “L’expression des serments dans la Grèce ancienne,” *Revue de l’histoire des religions*, 134 (Paris: Presses Universitaires de France, 1948), pp. 81-82.

34) 以下も参照。Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 15. バンヴェニストのいうインド-ヨーロッパ諸制度なるものの置かれる場がそれ自体注意に値するという点についての言及がある。

アガンベンは次のように述べている。

バンヴェニストが、最初にはすでに引用した 1947 年の論文において、次いで『インドヨーロッパ諸制度語彙集』において、誓言に対しておこなった模範的分析を見てみよう。いずれにおいても本質的なのは、辞項 horkos [誓言] を herkos へと、「囲い、柵、結びつき」へと引き戻す伝統的語源論を放棄するということ、そして誓言を指す専門的表現——horkon omnynai——を「[「聖化物」を力強く捉える」と解釈することである。つまり、horkos が指すのは「言葉でも行為でもなくもの、[……] まがまがしい力を備えた、約束に強制力を与える質料」である。horkos は、そのつどステュクス河の水や、英雄の<sup>しやく</sup>笏や、供犠に捧げられる犠牲の臓物へと受肉する「聖なる実体」である。[……]

歴史的制度を説明するということが必然的にその制度を聖なる文脈、ないし呪術的－宗教的文脈に引き戻すことを意味するという考えは、19 世紀末以来、人文諸科学では非常に強い [……]<sup>35)</sup>。

誓言に関連して、アガンベンが悪態をめぐってバンヴェニストの「瀆言と婉言」(1966 年)も参照している。

[……]「瀆言と婉言」(もともと、意味深いことに、神の名と神学の言葉遣いに関するシンポジウムで話された講演)で、バンヴェニストはしばしば、悪態、偽誓、誓言のあいだの近さを参照している(その近さは、フランス語では juron [悪態] と jurer [誓う] が同根語であることにおいて明らかである)<sup>36)</sup>。

そして、以下の引用がなされる。

[神々の] 崇拝の外にあって、社会は神の名が荘厳な付帯状況において引きあいに出されることを要請する。それが誓言である。というのも、誓言とは sacramentum、すなわち

---

35) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 17. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, “L’expression des serments dans la Grèce ancienne,” pp. 86, 90. 引用中の「聖化物」(objet-sacralisant)は誤解を生みやすい表現だが、その物が聖化されているのではなくて、その物のほうが何かを聖化する(その物を手にして聖化をおこなう)ということ。

これに続けて、バンヴェニストの horkos 解釈に影響を与えただろう研究として、エリアス・ピッケルマンの論文「宗教現象学について」(1935 年)が挙げられ、ピッケルマンとバンヴェニストの近さが云々されている (p. 19)。horkos の周辺で、epiorkos [偽誓] の意味解釈においてもバンヴェニストの名が(二次的にだが)引かれている (p. 60) ことも註記しておく。

36) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 53.

真理を証す最高の者たる神への呼びかけであり、嘘や偽誓のばあいには神罰に我が身を捧げるということだからである。これは人間の契約できる最も重大な誓いであり、また犯すことのできる最も重大な違犯である。というのも、偽誓は人間の正義ではなく神の裁可に属するからである。神の名が誓言の定式のなかに現れるのはそのためである。／瀆言においても神の名は現れるのでなければならない。というのも、瀆言は誓言と同じく、証す者として神を立てるからである。悪態 (juron) は誓いではあるが、侮辱の誓いである<sup>37)</sup>。

そしてアガンベンは、悪態が内容を欠いた間投詞的性格をもつことをバンヴェニストが強調しているとし<sup>38)</sup>、引用を続ける。

瀆言において口にされる定式は、いかなる客観的状况をとくに参照してもいない。同じ一つの悪態が、互いにまったく異なるさまざまな付帯状況において発せられる。悪態が表現しているのは、その付帯状況に対する反応の強度だけである。それは〔会話の〕相手を参照してもいないし、第三者を参照してもいない。それはいかなるメッセージも伝達せず、対話を開くこともせず、応答を引き起こしもしない。対話相手がそこにいるということさえ必要ではない<sup>39)</sup>。

そして、アガンベンは次のように述べている。

なおのこと驚かされるのは、悪態を説明するのにこの言語学者が言語分析を脇に置き、稀なことだがヘブライの伝統に依拠し、「神の名を発することが聖書において禁止されていること」へと回付しているということである。悪態はたしかに言語行為だが、まさに「神の名をその侮辱で置き換える」ことである。じつのところ、この禁止が対象としてい

---

37) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, pp. 53-54. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La blasphémie et l’euphémie,” in *Problèmes de linguistique générale*, 2, pp. 255-256.

38) アガンベンはさらに先でも、悪態のもつ間投詞的性質についてのバンヴェニストの指摘を参照している。Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 64. 「すでに見たとおり、バンヴェニストは「瀆言と婉言」で、悪態を定義づける間投詞的性格を強調している。彼は次のように書いている。「瀆言は感嘆として現れる。それは間投表現の統語をもち、その最も典型的な様態をなす」。あらゆる感嘆同様、悪態もまた「生き生きとした、突然の感情に押されて洩れる言葉」である。あらゆる間投表現同様、それ自体意味をもつ辞項を（「あっ！」とか「おお！」とかいうオノマトペの間投表現において起こっているのとは異なり）つねに用いるとしても、その表現には交流的性格はなく、本質的に非意味的である」。バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La blasphémie et l’euphémie,” p. 256.

39) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 54. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La blasphémie et l’euphémie,” p. 256.



るのは、意味あるこれこれの内容ではなく名の単なる発音、つまり「純然たる声の分節化」である。この直後で、フロイトの引用が、悪態を心理学的用語で解釈することへの導入となっている<sup>40)</sup>。

そのフロイトからの引用に続く部分をアガンベンはさらに引用している。

[……] 神の名の禁止は、人間の最も強い欲望の一つを抑制するものである。その欲望とはつまり、聖なるものを瀆することである。知ってのとおり、聖なるものはそれ自体によって、両価的な振る舞いを生じさせる。宗教的伝統は、神的な聖なるものだけを取っておこうと欲し、呪われた聖なるもののほうを排除しようと欲した。瀆言は瀆言なりのやりかたで、神の名自体を瀆聖することによってこの全体性を回復させようとする。瀆言で神の名が瀆されるのは、神について人の所有しているのは神の名だけだからである。人が神を動かすべく、もしくは神を傷つけるべく神に達することができるのはそのことによってのみ、つまり神の名を口にすることによってのみである<sup>41)</sup>。

そのうえで、バンヴェニストが神の名の禁止という聖書の伝統に依拠してしまったことを批判している<sup>42)</sup>。

(アガンベンは、「誓言」と<sup>スピーチ・アクト</sup>言語行為論の関係についてもバンヴェニストを参照して議論を展開しているが、それについてはすでに別稿で述べた。)

さらに、この「誓言」(horkos)と密接に結びつく語彙が「信」(pistis, fides, \*kred)である。バンヴェニストによる議論が最初に参照されるのは、『残る時間』の「誓言」と題された節である。そこではいみじくも、「辞項 pistis および形容詞 pistos (信用されている)の古い意味の一つは、辞項 horkos, すなわち誓言の同義語——あるいは pistos のばあいはその不可形容詞——といったものである。それは、pistin kai horka poieisthai「誓言をおこなう」や pista dounai kai lambanein「誓言を交わす」といった表現に見られる。ホメロスにおいて、horkia, すなわち誓言こそがすぐれて pista「信用されている」ものである<sup>43)</sup>」云々と述べられている。

ギリシア人が pistis と呼び、ローマ人が fides と呼んでいた非常に古いインド-ヨーロッパ

40) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 54. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La blasphémie et l’euphémie,” pp. 254-255.

41) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 55. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La blasphémie et l’euphémie,” p. 255.

42) 以下を参照。Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, pp. 55-56.

43) Agamben, *Il tempo che resta*, pp. 106-107.

パ制度に発するものの相貌を、純粹に言語的なデータから出発して復元したのは、セファルディ系ユダヤ人である大言語学者——もしかすると、今世紀〔20世紀〕最大の言語学者かもしれないエミール・バンヴェニスト——の功績である。彼はこれを「個人的忠誠」(fidélité personnelle)と定義づけている。「信」とは、私たちが自分の信賴を誰かに置き、忠誠関係においてその者と自分が結びつくに際しての何か担保のようなものをその者に預けると、その帰結としてその者のもとで享受される信用のことである。信が、誰かに私たちが授ける信賴——私たちが与える信——でもあれば、私たちが誰かのもとの享受する信賴——私たちがもつ信、信用——でもある、というのはそのためである<sup>44)</sup>。

そのうえで、バンヴェニストが引かれる。

ある人によって自分に置かれた fides を所持する者は、その相手を意のままにできる。fides がほとんど dicio や potestas [支配、権力] の同義語になるのはそのためである。原初的形式においては、これらの関係はしかじかの相互性をともなっていた。誰かに自分の fides を置けば、見返りにその人の保証や支えが手に入った。しかし、このことさえ、条件の不平等性を強調している。それはつまり、服従する者への保護と同時に、その者の服従と交換に、服従のかぎりにおいて行使される権威である<sup>45)</sup>。

『残る時間』はパウロの時間論なので、当然キリスト教的な意味あいでの信が問題となる。これに関しては次のように述べている。

バンヴェニストによれば、credo [信ずる] は文字どおり「\*kred を与える」こと、つまり、自分を保護してくれると期待する相手のうちに呪術的な力を置くことを意味し、そこからその者を「信ずる」ことを意味するようになる。古い語根 \*kred がラテン語では消滅してしまったので、これに非常に似た観念を表現していた fides が、credo に対応する実詞として場を占めた<sup>46)</sup>。

---

44) Agamben, *Il tempo che resta*, p. 107.

45) Agamben, *Il tempo che resta*, p. 108. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 1 (Paris: Minuit, 1969), pp. 118-119.

46) Agamben, *Il tempo che resta*, p. 108. バンヴェニストは以下が参照されている。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 1, p. 121. なお、バンヴェニストは「\*kred を与える」ではなく「\*kred を置く」(placer le \*kred)と書いている。なお、この後、同一の文脈でバンヴェニストの名が数回挙がる (pp. 108, 110)。

この議論は、『言語活動の秘蹟』でも、ほぼそのままの形で繰り返されている<sup>47)</sup>。また、『創造とアナキー』（2017年）所収の「宗教としての資本主義」にも、バンヴェニストからの同一箇所<sup>48)</sup>の引用が見られる。

#### 4. その他の語彙 (2) charis, domus, aedes, potis

『残る時間』では「恵み」(charis)に関するバンヴェニストの語彙論も参照されている。「パウロにおいて、信というテーマのそばに、恵み(charis)というテーマが現れるところを私たちは目にする。これは——ここでもやはりバンヴェニストが示しているように——本質的に、対抗給付や命令といった義務的拘束から解かれている無償の給付という意味をもっている<sup>49)</sup>」。

「家」関連の語彙についてもバンヴェニストが参照されている。2012-13年度にメンドリシオ(スイス)の建築アカデミーでおこなわれたという連続講義の第1回だけが「第1回」と題して公にされているが(2015年)、そのなかにその語彙論が登場している。ここは少し長めに引用しておく。

もしかするとこれまでに存在したなかでも最大の言語学者かもしれないエミール・バンヴェニスト、『インド-ヨーロッパ諸制度語彙集』と題された、言語活動に関する西洋の省察のあの<sup>スナ</sup>大全——読んでいないのであれば、黙ったほうがよい——の作者は、家を指すインド-ヨーロッパの辞項は、互いに判明に分かたれる二つの観念が互いに重なりあっているように思われると指摘している。その一方は〈住みかとしての家〉で、こちらは社会的所属を表現している(ラテン語では domus と言われる。これは familia[家族]や gens[一族]の場を指す)。他方は〈建てもんとしての家〉である(ラテン語では aedes と言われる)。この二つの観念をインド-ヨーロッパの語根\*dem において一つに混ぜあわせてしまう傾向があるが、両者は互いに判明に分かたれるものと見なすべきだ、とバンヴェニストは言う。〈住みかとしての家〉と〈建てもんとしての家〉は、部分的には、空間において一致することがあるにせよ、互いにほとんど関係のない二つの現実をそれぞれ表現している。domi、つまり自宅にいる、とは、「これこれの建てもんのなかにいる」ということを意味するのではなく、これこれと規定された法的・社会的な文脈(domus-familia)に

47) 以下を参照。Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, pp. 35-36. なお、\*kredの消滅にともなって fidesに置き換えられる云々という説は、『残る時間』ではバンヴェニストによるものとも読めるが、『言語活動の秘蹟』ではアントワヌ・メイエによるものと記されている。

48) 以下を参照。Agamben, *Creazione e anarchia*, p. 120.

49) Agamben, *Il tempo che resta*, p. 111. バンヴェニストは以下が参照されている。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 1, pp. 201-202.

属しているということを意味しており、そこにあって人は自宅にあり、自宅にいると感ずる。それはただ近親者のあいだにいるからというだけではない。domi bellique, すなわち「平時と戦時に」「文字どおりには「家と戦争で」」という対置によって示されるように、家においてはしかじかの関係が可能で, hostis (公敵) との関係といった他のしかじかの関係が排除されているからでもある<sup>50)</sup>。

次は\*potisである (アガンベンはラテン語と記し, アステリスクも付していないが, インド-ヨーロッパの語根と想定されるものである)。\*potisが, もともと「……自体」を指し, それが「主」<sup>あるじ</sup>を指すよう転じた, というバンヴェニストの説明が引かれている。以下がアガンベンの記述である。

「主」<sup>あるじ</sup>を意味するラテン語 potis (およびその派生元である pot) のもともとの意味は実際には個人の同一性を参照するものであり, それは, 「まさにその人, その人自身」を意味する小辞 (ラテン語 ipse におけるように, しばしば形容詞もしくは代名詞) によって表現される (「言説内で問題になっていた対象へと回付する」接小辞ヒットタイト語 pet や, これこれの述語によって指しているかぎりでの誰かを指す utpote 「まさに……として」におけるように), ということをバンヴェニストは示した。「主」<sup>あるじ</sup>を指す単語がどのようにして「その人自身」を意味するまで弱化しえたのかを構想する難しさは, 「その人自身」を意味する, 個人の同一性をしるしづける形容詞がどのようにして「主」<sup>あるじ</sup>という固有の意味を引き受けえたのかを理解する容易さに等しい」。バンヴェニストはこのようにして, これと同じ意味上の移動が多くの言語において見いだされることを示している。ラテン語 ipsissimus [まさしく自身] がプラウトゥスにおいて「主」<sup>あるじ</sup>を意味する, というだけではない。ギリシア語でも, ピタゴラス教団では, autos epha 「彼自身がそう言った」は, すぐれて主たるものであるピタゴラスを指していた<sup>51)</sup>。

50) Agamben, “Séance I,” trans. Ermioni-Iliana Syrrou, in Constantin Irodotou, ed., *Mélanges offertes à René Schérer* (Paris: L’Harmattan, 2015), p. 16.

51) Agamben, “Sul dicibile e l’idea,” in *Che cos’è la filosofia?* (Macerata: Quodlibet, 2016), pp. 80–81. なお, \*potis をラテン語の単語と誤認している他にも, アガンベンによるバンヴェニストの参照はここではかなり正確さを欠いている。参照されているバンヴェニストは以下。Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, 1, pp. 89–90.